

開催地名	愛知県日進市
開催日時	令和7年12月11日(木) 10:00 ~ 11:30
開催場所	日進市役所
語り部	伊藤 正治(岩手県大槌町)
参加者	市職員 約40名(オンライン参加を含む)
開催経緯	本講演会は、防災関連計画等に関する職員への普及啓発を一層促進し災害発生前からの備えの強化および災害発生時における迅速かつ的確な対応を推進することを目的としている。その推進を図るため、日進市防災推進連絡会議の関連事業の一環として企画した。昨年度の好評を受け、本年度も引き続き開催する運びとなった。
内容	<p>(1)大槌町の特徴</p> <p>3.11からちょうど今日で14年と9ヶ月が経った。盛岡から大槌町まで5時間かかる距離だが、津波はこの距離をわずか30分で到達する速さである。また、大槌町はリアス海岸に面した港町で、湾が奥に行くほど狭くなる地形を持つ。その湾の中央には蓬萊島があり、「ひよっこりひょうたん島」のモデルとも言われてきた。かつては波が穏やかで、日本の海水浴場百選にも選ばれた砂浜が広がっていたが、その砂浜は津波によって完全に失われた。</p> <p>町の中心部は昭和30年代以降の高度経済成長期に、海を埋め立てて形成された地域である。私が小学校の頃まで川の向こうは海であり、防潮堤や松原が広がっていた。その後、町は海に向かって開かれ、結果として町の総面積の2%にも満たない土地に人口の8割が集中する構造となった。これは津波に極めて弱い町が意図せず作られていったことを意味する。海に向かって開かれたまちづくりは、平時には利便性をもたらしたが、災害時には被害を一気に拡大させる要因となった。</p> <p>(2)津波の威力と失われた命</p> <p>津波は砂浜をえぐり、町の中心部を一瞬で消し去った。動画で見る3分という時間は長く感じるが、その3分間で町全体が破壊された。仮に何千台もの重機を投入しても、3分で町を消し去ることは不可能である。それほどの威力が津波にはあった。</p> <p>避難場所とされていた寺院でも、約60人が逃げ込んだまま命を落とすという、本来あってはならない事態が起きた。大槌町では死亡者、行方不明者、関連死を合わせて1,286人が犠牲となり、岩手県全体では4,000人を超える命が失われた。</p> <p>津波災害の特徴は、行方不明者が非常に多いことである。岩手県では約1,700人、大槌町だけでも約400人がいまだに帰ってきていない。14年を経てDNA鑑定</p>

によって身元が判明し、ようやく家族のもとへ戻る例もある。災害は過去の出来事ではなく、今も続いている現実だ。家・役場・商店、水道や電気も、一瞬にして町は消滅したのである。

(3) 逃げ遅れを生んだ要因と人の心理

これほどの犠牲者が出てしまった要因として、「きっと大丈夫だろう」という思いがある。長い揺れの中でも、人は自分だけは助かると思ってしまう。時間感覚も失われ、3分なのか5分なのか分からないまま、判断が遅れる。

2階にいれば大丈夫だと思った家が流され、建物の高さや強度を過信した結果、命を落とした例も多い。周囲の様子に合わせてしまい、誰も逃げていないから自分も逃げなくていいと判断してしまう同調性のバイアスも働いた。

一度避難したにもかかわらず、財産や薬、ペットを取りに戻り、命を落とした人もいる。防災無線が途中で聞こえなくなり、情報が届かなかった地域もあった。避難所そのものが被災したことで、「そこに行けば安全」という前提が崩れたことも大きい。

正常性バイアス、同調性バイアス、経験値のバイアスが重なり、逃げ遅れが生じた。三陸沿岸では千年の間に20回以上の津波が記録されているにもかかわらず、「自分が生きているうちには来ないだろう」という思い込みが、多くの犠牲者を生む結果を招いた。

(4) 避難所の混乱と共助の力

指定されていた避難所は29か所あったが、多くが被災し、実際には100か所以上に避難が分散した。学校、寺、神社、事業所、倉庫、畑、高台の民家など、残された場所すべてが避難場所となった。誰がどこにいるのか把握することは不可能であった。

避難所は混乱状態で、靴のまま上がり込み、隣に誰がいるかも分からない。寒さをしのぐためにカーテンを切り、衣服代わりにした。衛生環境は悪化し、とりわけ深刻だったのがトイレの問題である。水や食料は我慢できても、排泄は我慢できない。トイレを避けるために水を飲まなくなり、脱水症状や持病の悪化を招く人が続出した。

脳梗塞や心筋梗塞を発症した人も少なくなかった。避難所でまず確保すべきは「食べる・出す・寝る」の三つである。この基本が命と健康を支える。

当初、炊き出しは役場職員が担っていたが、次第に避難者自身が役割を担うようになった。高齢の女性たちが調理を始めると、避難所に活気が戻った。自分が役に立つこと、人のためになることが、生きる力を生むのである

(5) 備えの本質と防災教育

備えは物だけでなく心の準備が重要である。市販の非常用ザックに頼るだけでなく、自分や家族に本当に必要なものを点検する必要がある。携帯トイレはその代表例であり、命と尊厳を守る備えである。学校での防災学習は家庭を動かす力がある。子どもを通じて家庭で点検する仕組みが重要である。避難所では中高生が水汲みや清掃、物資運搬を担い、大きな力を発揮した

災害時の支援物資配分では、避難所にいる人だけでなく、在宅避難者に物資が届かないという課題が顕在化した。高齢者や移動手段を持たない人は避難所に来られず、人手不足も重なって支援が行き届かなかった。平時は自主防災組織や町内会が機能するが、災害時にはそれも破綻し、外部ボランティアに頼らざるを得なかった。しかし土地勘やニーズが分からず、分配方法や指示体制の未整備が問題となった。物資の偏りは不満や感情のずれを生み、在宅避難者も被災者であるという認識が共有されにくかった。漏れやムラをなくすことが支援の基本であり、社会福祉協議会との連携強化で改善が進んだ。

発災直後、役場庁舎は壊滅し、指示命令系統は途絶えた。職員は個々の判断で動くしかなく、132名中40名が職務中に犠牲となった。防潮堤への過信や公務優先の意識が避難の遅れにつながった面もある。対策本部では各機関の調整が難しく、通信手段も警察の専用電話一本に限られた。遺体対応は職員に大きな心身の負担を残し、心のケアの重要性が明らかとなった。一方、全国からの派遣職員は復旧と学校再建を支えた。被災地では、状況に応じた柔軟な判断と横断的連携、日頃からの避難路や危険箇所の把握が不可欠である。

実は3.11の2日前にも地震があり、その後にあの大津波が発生した。もし当時、後発地震の方が大きな被害をもたらすことがあるという知識があれば、「危ない、逃げなければならぬ」と判断できたかもしれない。

南海トラフ地震についても「30年以内に高い確率」と言われているが、30年とは明日から始まる30年かもしれない。東日本大震災でも震度7や6クラスの揺れが繰り返し発生した。こうした現実を踏まえ、訓練の中でも本気で想定し、備えを継続していく必要がある。

(6) 「津波てんでんこ」と近所で助け合う避難

地方には「津波てんでんこ」という言葉がある。地震が起きたら、まず自分で自分の命を守るという教えである。これは自分勝手という意味ではなく、自分の命を守ることが、結果として他の命を救うことにつながるという考え方である。高台に避難した中学生が、下に祖母がいると聞き、迎えに戻ったという話がある。祖母は「自分はいいから逃げろ」と言ったはずだが、その子と一緒に逃げよ

	<p>うとした。まず自分が助かることで、助かる別の命があるということを考えてほしい。</p> <p>また、最近の火災でも、近所同士で声を掛け合い、手を引いて逃げたことで助かった例が報じられている。自助・共助・公助があるが、最後に命を守るのは、向こう三軒両隣という身近な関係である。個の力を、まち全体の力へと高める防災が必要である。</p> 
開催地より	<p>いつ来てもおかしくないと言われる南海トラフ地震については、歴史的な大震災である東日本大震災の教訓を踏まえ、平時から災害が起きる前の備えにつながる防災意識を一層高める必要がある。本日の講演会が、その意識向上の一助となることを心より願っている。</p>